松村謙三先生を伝えよう

松村謙三先生没後44年記念事業

特別企画展示会　関係資料　その2/2　吉田　茂　往復書簡から

記念講演会　　平成27年8月 21 日(金)

記念企画展示会　平成27年8月 21 日(金)～28日(金)

主催／松村謙三顕彰会　南砺市日中友好協会　後援／南砺市

●記念企画展示品目録

(1) 松村謙三の持ち物

①張作霖爆殺事件時に携行した旅行鞄　1928　（参考　p. 9, 18, 19）
②松村先生佩風のシルクハット　（参考　p. 9, 20）
③勲章(従二位勲一等旭日桐花大綬章)　1971　（参考　p. 10, 21）

(2) 各種書簡

①重光葵短冊　1945　（参考　p. 10, 22, 23, 24）
②重光葵氏書簡　1946　（参考　p. 10, 25, 26）
③重光葵氏から松村謙三宛書簡　1952　（参考　p. 11, 27, 28）
④重光葵氏から松村謙三宛書簡　1953　（参考　p. 11, 29, 30, 31）

⑤吉田茂首相から松村謙三宛書簡　1948　（参考　p. 11, 32, 33）
⑥吉田茂首相から松村謙三宛書簡　1955　（参考　p. 12, 34, 35）
⑦松村謙三から吉田茂首相宛書簡　不明　（参考　p. 12, 36, 37）

⑧松村謙三から正力松太郎氏宛書簡　1923　（参考　p. 12, 38, 39）
⑨秋の叙勲における松村謙三・正力松太郎・大橋八郎の３氏　1964　（参考　p. 13, 40）

⑩町田忠治氏への書簡　1946　（参考　p. 13, 41, 42, 43, 44）
⑪松村謙三から中野長作氏への書簡　1950　（参考　p. 13, 16, 17, 45, 46）
⑫松村謙三から村田豊二氏宛書簡　1952　（参考　p. 14, 47, 48）

(3) 肖像画・その他

①正三位勲一等町田公墓誌　松村謙三書　1947　（参考　p. 14, 49）
②松村謙三　色紙（近藤日出造画）　不明　（参考　p. 14, 50）
③松村謙三　油彩画(石井鶴三画　衆議院議員永年勤続表彰記念) 1959（参考　p. 15, 51）
④先憂後楽　1943　（参考　p. 15, 52）
⑤松村松宇還暦祝い祝賀貼り混ぜ屏風　1902　（参考　p. 15, 16, 53, 54, 55）
⑥坂田秀男氏より寄贈された木彫額　1971　（参考　p. 16, 56）

※　松村謙三先生の略年譜　（参考　p. 57, 58, 59, 60, 61）

⑵⑤吉田茂首相から松村謙三宛書簡
(1948年12月29日・推定)

時候の挨拶。

(2)⑤

拝啓過般来御尋
致度と存延引候處
政情紛件之為
御尋致兼候段御寛
恕可被下候　何れ
春永ニ参上可致
心得候　何遂よき
御年を御迎可被下
無事明春を期し
一筆如此候
頓首

吉田　茂

松村老臺　侍史

十二月廿九日

(差出人)

松村謙三様　侍史

大磯　吉田　茂

十二月廿九日

(2)⑤吉田茂首相から松村謙三宛書簡
(1948年12月29日・推定)

時候の挨拶。

⑵⑥吉田茂首相から松村謙三宛書簡
(1955年12月7日)

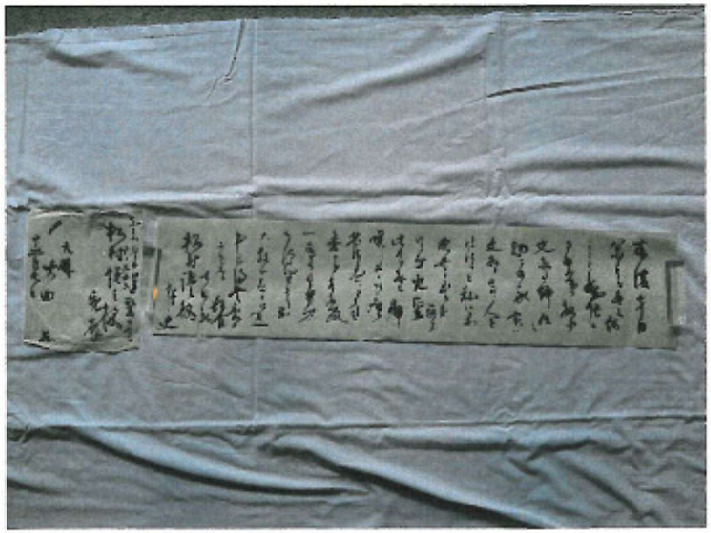
第二次鳩山一郎内閣(1955年（昭和30年）3月19日～同年11月22日)での文部大臣の辞任を惜しむ内容。

(2)⑥

拝復　年内
余りも無之　何
かと御繁忙之
事拝察候　扨而
文相御辞任之
趣被為承　実ハ
文相ニその人を
得たりと私かに
欣幸の至りと存
　　罷在
候處失望
此より無之　痛
嘆之至りに御座候
尚ほ益々御自
愛被下可〇故
一層の御努力
を待望仕候　不
取敢一應の御返
事迄得貴意候

十二月七日　頓首
　　吉田　茂
松村謙三様
　　侍史

（宛先）
東京都中野区鷺の宮
　六ノ七五六
松村謙三様
　　親展



⑵⑥吉田茂首相から松村謙三宛書簡

(1955年12月7日)

第二次鳩山一郎内閣(1955年（昭和30年）3月19日～同年11月22日)での文部大臣の辞任を惜しむ内容。

⑵⑦松村謙三から吉田茂首相宛書簡

吉田茂首相よりお歳暮を頂いた礼状。(年代不明)

(2)⑦

謹啓

新春御清安御慶

申上候　旧臘拝趨

久々にて御歓緩談之機

を得申し誠ニ欣懐

千萬ニ奉存上候　先

般ハ御懇書拝披

御使を以て珍敷御

品御恵投下され

誠ニ難有早速

風味仕候　御芳志

拝謝千萬ニ御座候

時局極めて重大

寒心ニ堪不申

深憂此事ニ御座候

孰れ拝芝萬〃

拝叙可仕候

國元寒嶽

一尾旧臘御届

申上候御風味を願ふ

ほどの品ニハ無之唯

歳末之御印まで

に御覧ニ供し候

寒中御自愛

是祈上申候

正月三日

松村謙三

吉田茂様

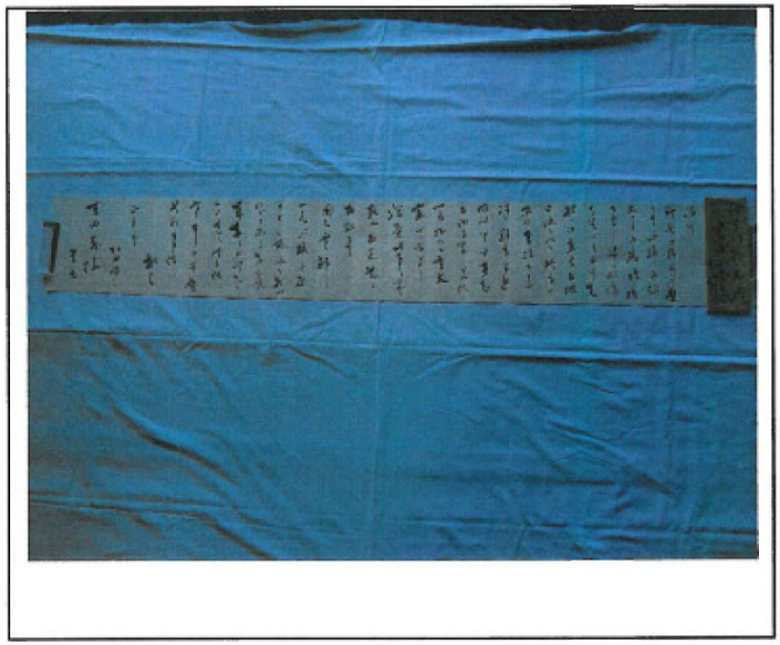
貴台

（宛先）

神奈川県大磯

吉田　茂様

貴台



(2)⑦松村謙三から吉田茂首相宛書簡

吉田茂首相よりお歳暮を頂いた礼状。（年代不明）

⑵⑧松村謙三から正力松太郎氏宛の書簡

1923年9月1日(大正12年)の関東大震災直後に松村謙三から高岡中学の後輩にあたる正力松太郎(1985～1964)宛て出されたもの。当時、正力松太郎は警視庁官房主事の地位にあり、知人の捜索をお願いした内容の書簡。当時の松村謙三は福光在住時代。

関東大震災(日本橋周辺)

国立近代美術館フィルムセンター所蔵

（2）⑧

謹啓

帝都の激震実に未曾
有之惨禍誠に悲しむ可き事ニ
御座候定めて日夜治安之為
御奔走之御事と奉存上候陳者
此の状持参中條氏ハ小生の
懇親ニ有之小石川ニ於ける
親戚捜索之為上京被渡
候次第ニ御座候行情萬一
不明等の事有之候ハバ何卒
警察之手ニて可然御高配
を賜り度勿論昨今之状
態ニてハ御寸暇も無之事と
存候へ共宜敷御願奉申上候
先ハ御願義如此候得共
時下御自重之程奉願上候

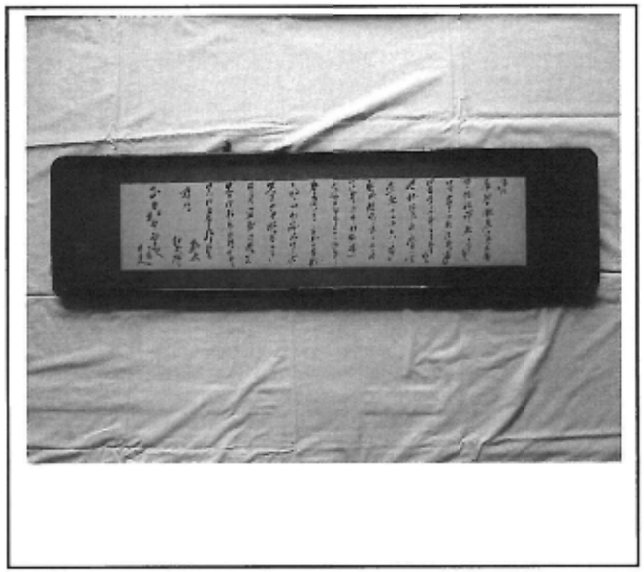
敬具

九月三日

松村謙三

正力松太郎様

待史



(2)⑧松村謙三から正力松太郎氏宛の書簡

1923年9月1日(大正12年)の関東大震災直後に松村謙三から高岡中学の後輩にあたる正力松太郎(1985～1964)宛て出されたもの。当時、正力松太郎は警視庁官房主事の地位にあり、知人の捜索をお願いした内容の書簡。
当時の松村謙三は福光在住時代。
関東大震災(日本橋周辺)

国立近代美術館フィルムセンター所蔵

⑵⑨秋の叙勲における松村謙三・正力松太郎・大橋八郎の3氏　1964年(昭和39年)

1964年(昭和39年)秋の叙勲時に揃った3氏。旧制高岡中学の同窓生である。

松村謙三(旧制高岡中学校第一回卒業生)は勲一等旭日大綬章、正力松太郎(旧制高岡中学校第3回卒業生)は 勲一等旭日大綬章を受章、大橋八郎(当時は日本電信電話公社総裁)は　勲一等瑞宝章(旧制高岡中学校第2回卒業生)である。なお、大橋八郎は日本放送協会(NHK)会長として、1945年(昭和20年)8月15日の玉音放送の録音時に立ち会った。

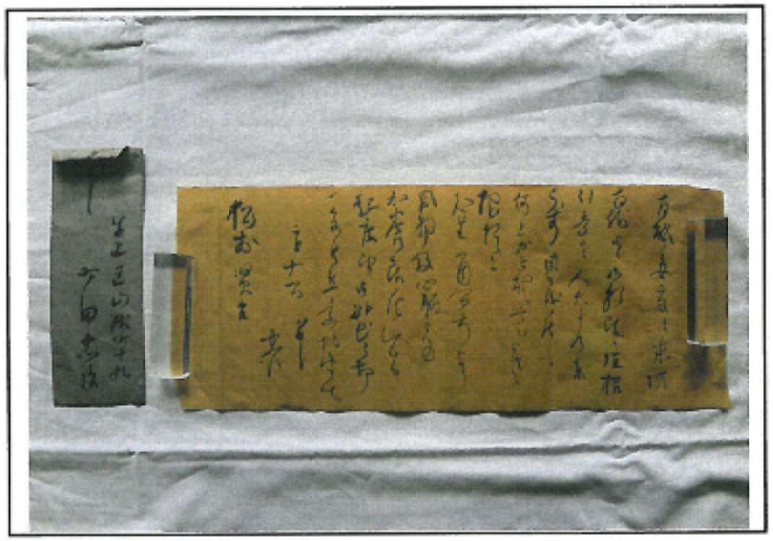
⑵⑩町田忠治氏への書簡
(1946年3月11日)

松村謙三は1928年(昭和3年)2月20日第16回衆議員議員選挙において、初当選し議員活動を開始した。翌年 1928年(昭和4年)7月5日に町田忠治農林大臣(1863～1946)の秘書官となり、その後も同省参与官として町田忠治に仕えた。

この書簡では、牛込の町田宅が空襲で焼け、練馬に疎開し、再度牛込に戻り家を建てるときに人夫が不足している、人夫の斡旋を依頼した内容。

松村謙三は「町田忠治翁伝」町田忠治翁伝記刊行会　を自ら執筆するなど、町田忠治氏を生涯に渡り政治の師と仰いだ。

この書簡からも親しい間柄が文面から伺える。



(2)⑩
拝啓　毎度御来訪
拝謝仕候。御願致候　垣根
引受は人夫十分参
らず閉口致居候。
何とか御配意御座候
様願上候。
老生一週間前より
風邪及心臓ため
加療致居候。今日
起床致候。御外出之折
一度御立寄切待候
三月十一日　草々
忠治

松村賢台
（差出人）
牛込区山伏町十九
町田忠治

(2)⑩町田忠治氏への書簡

(1946年3月11日)

松村謙三は1928年(昭和3年)2月20日第16回衆議員議員選挙において、初当選し議員活動を開始した。翌年1928年(昭和4年)7月5日に町田忠治農林大臣（1863～1946）の秘書官となり、その後も同省参与官として町田忠治に仕えた。
この書簡では、牛込の町田宅が空襲で焼け、練馬に疎開し、再度牛込に戻り家を建てるときに人夫が不足している、人夫の斡旋を依頼した内容。
松村謙三は「町田忠治翁伝」町田忠治翁伝記刊行会　を自ら執筆するなど、町田忠治氏を生涯に渡り政治の師と仰いだ。
この書簡からも親しい間柄が文面から伺える。

町田忠治―松村が師と仰いだ政党政治家―

町田忠治（幾堂１８６３～１９４６）秋田県出身。ジャーナリスト、銀行界から大隈重信の知己をえて政界に入る。民政党立党時から中枢をしめ、経済や農政に明るい政治家として、昭和元年若槻内閣、昭和４年浜口内閣の農林大臣に任ぜられた。昭和３年初当選の松村謙三は農林大臣秘書官として町田に仕え、政治家の第一歩を踏み出した。

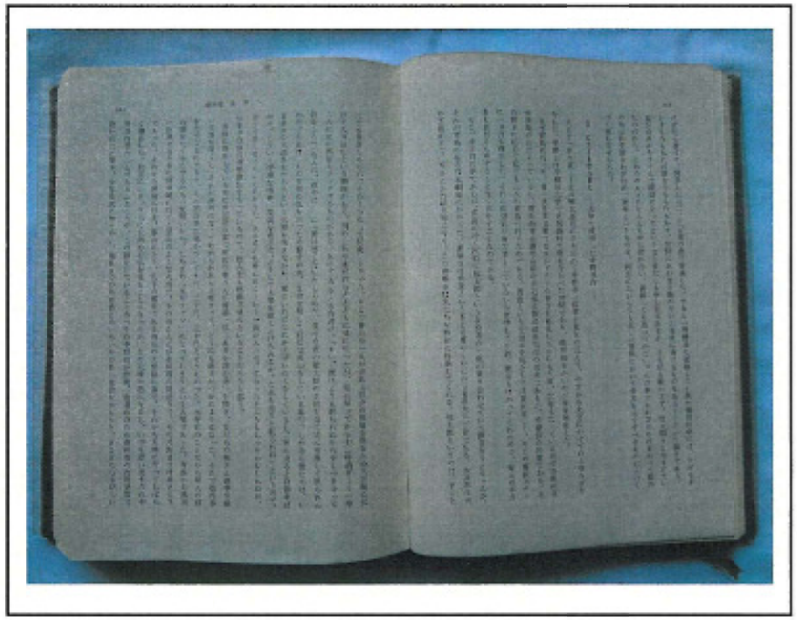
のちに党総裁となる町田のもとで政党政治の本質を学び、また軍部による政党への圧迫に対応した。終戦直後はともに占領下の国家再建と政党政治の復活に努力した。町田は戦後日本進歩党の総裁に推挙され次の総選挙が待たれていたが占領軍総司令部の公職追放令によって政界を追われ、昭和２１年１１月に死去した。東京文京区護国寺の大隈重信の傍に葬られた。

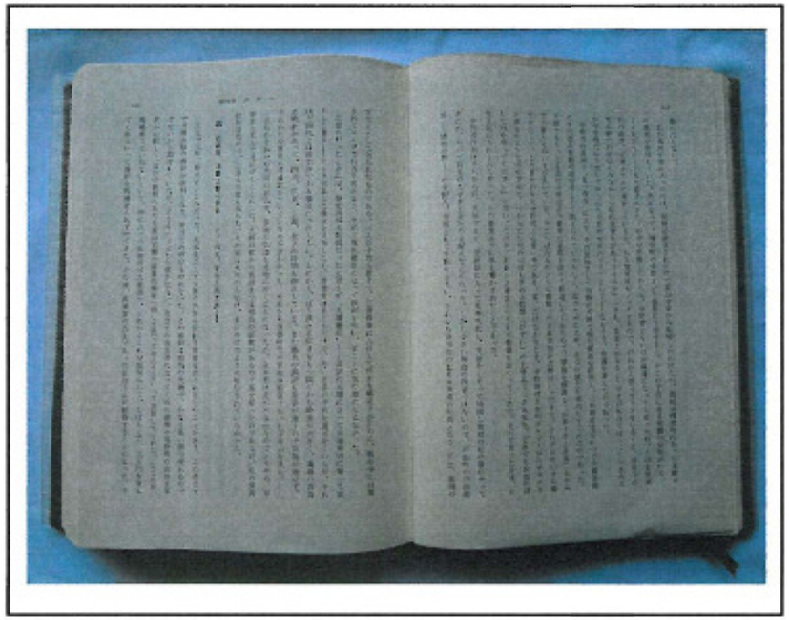
「町田忠治翁傳」は町田を慕う旧民政党の有志の間で編さんが決まり、松村謙三がすべて一任されて、追放中に執筆・編

さんに当ったもので、昭和２５年８月町田ゆかりの東洋経済新報社から出版された。単なる伝記にとどまらず、町田と松村がともに体験した昭和戦前から戦後にかけてのわが国の近代政治史の歩みをしるす貴重な内容を含む。松村がみずから筆をとった唯一の著書である。

(2)⑪

飛電あり「残念ながら
落選した」と然し小生ハ少
しも残念とは思わなかった。
唯　微苦笑する耳であった。
元来何故戸出の町長候
補などに出たか。高岡、富山
の市長ならまだしも戸出町長
とは奇抜である。そして落
選したとは猶更ら奇抜
である。恐らく君の本意
は同町有志同士の勧誘
懇請もだし難く例の男
気を出したものであろう。然し
西郷隆盛の役目はこれで
済んだ。同士への義理も
これで済んだ。後は酒々
楽々としてゐ給へ。
兄の人徳といふか。この様な
失敗をやっても少しも君の
価値に関せぬ。唯笑った
丈けで済む。外の人ならそう
はいかぬ。全く君の独得
の風格である。
これから専念会社の経
営に帰れ。君を要する
仕事は前途に沢山ある。
自愛すべきである。健康、
摂生ニ注意せよ。
今度の事は笑って済ま
せ。
五月ニハ更ニ帰省の予定
萬々、其時ニ拝晤を得たし。
其前ニ一度上京の機会
なきか。或は機会を作りても
上京せぬか。春風駘蕩

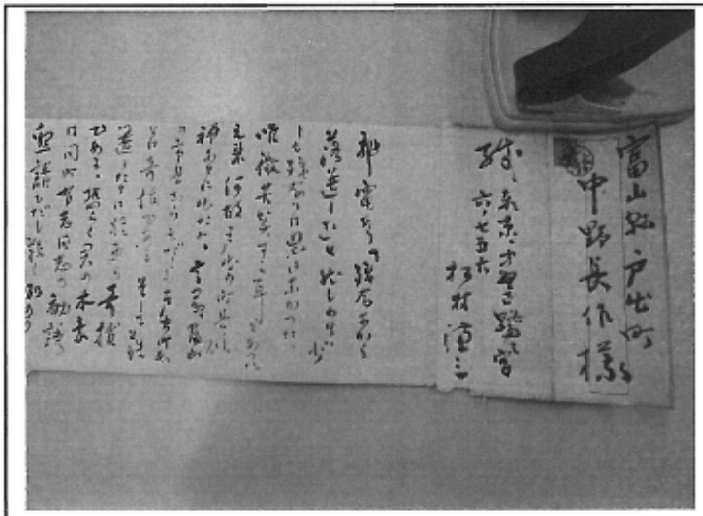




三代回顧録　中野書簡記載部分
P102～104

熱海でゞも緩々今度の
疲を養ってハ如何僕も
同行する。如何々々
四月二十五日　朝
松村謙三
中野老兄
貴下

（宛て先）
富山県戸出町
中野長作様
（差出人）
東京中野区鷺之宮
六ノ七五六
松村謙三



⑵⑫松村謙三から村田豊二氏宛書簡

日本のペスタロッチ(※1)、山崎兵蔵先生の業績をまとめた「一茎白華」の出版に差際して、序文を求められ執筆した。「現文相」とは天野貞祐(※2)。題辞を依頼されたもの。

※1　ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746年1月12日 - 1827年2月17日）は、スイスの教育実践家、シュタンツ、イベルドン孤児院の学長。フランス革命後の混乱の中で、スイスの片田舎で孤児や貧民の子などの教育に従事し、活躍の舞台として、スイス各地にまたがるノイホーフ、シュタンツ、イフェルドン、ブルクドルフがなどが有名である。

※2　天野 貞祐（あまの ていゆう、1884年9月30日 - 1980年3月6日）は、大正・昭和期の日本の哲学者・教育者・文学博士。京都帝国大学名誉教授。第二次世界大戦後は第一高等学校校長・文部大臣（第3次吉田内閣）を務めた後に獨逸学協会学校を母体として創立された獨協大学の初代学長を務めた。文化功労者。
(※1,2共にウイキペディアより)

(2)⑫

謹啓　寒中再度
陋屋　御通訪被下
感謝致し候。御仰
せの貴著序文
匆々走筆唯今
同封御届申上候。御
役ニ立ち候ハバ幸
甚ニ候。全く時間無
之為め　推敲も出来
不申御叱正下され
度候。又　冗長なれば
適宜御削り下さ
るべく候。
現文相の題辞
草案　相手
上京後、示談
可申候。
時下、御自重御祈
申上候。　然可候
二月十七日
松村謙三
村田先生　侍史

原稿用紙も手元
に無之便箋ニ書
き流し致候。適当
に御浄写願上候。

(2)⑫松村謙三から村田豊二氏宛書簡

日本のペスタロッチ(※1)、山崎兵蔵先生の業績をまとめた「一茎白華」の出版に差際して、序文を求められ執筆した。「現文相」とは天野貞祐(※2)。題辞を依頼されたもの。

※1　ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746年1月12日－1827年2月17日）は、スイスの教育実践家、シュタンツ、イベルドン孤児院の学長。フランス革命後の混乱の中で、スイスの片田舎で孤児や貧民の子などの教育に従事し、活躍の舞台として、スイス各地にまたがるノイホーフ、シュタンツ、イフェルドン、ブルクドルフがなどが有名である。

※2　天野 貞祐（あまの ていゆう、1884年9月30日－1980年3月6日）は、大正・昭和期の日本の哲学者・教育者・文学博士。京都帝国大学名誉教授。第二次世界大戦後は第一高等学校校長・文部大臣（第3次吉田内閣）を務めた後に獨逸学協会学校を母体として創立された獨協大学の初代学長を務めた。文化功労者。

(※1,2 共にウイキペディアより)

⑶①正三位勲一等町田公墓誌

松村謙三書　（１９４７）

敬愛する政治上の師であった民政党総裁町田忠治の顕彰の碑文。文章作成、筆書から銅版制作の交渉にいたるまで松村の手になる。町田夫人と相談しながら音羽護国寺の町田家墓地に建碑するため制作した。

日記によるとこの浄書は昭和２２年６月２２日の終日行われたとある。

⑶②松村謙三　色紙　　近藤日出造　画

戦前から昭和３０年代にかけて新聞紙上に掲載された政治漫画は人気があり、漫画家としては麻生豊、岡本一平、近藤日出造（1908～1979）、清水崑、横山泰三などが活躍した。

⑶③松村謙三肖像　油彩画

永年在職議員表彰記念　（1959）

昭和34年10月永年在職議員（25年）として衆議院本会議で表彰されたが、院内に肖像画を掲示する慣例について、このような事を好まなかった本人の抵抗で肖像画の制作はのびのびになり、完成したのは３年後だった。

作者の石井鶴三（１８８７～１９７３）は彫塑家で東京美術学校で同期の松村秀太郎（福光新町在住１８８８～１９７１）と終生変わりない親友であった。画家について謙三から相談を受けた秀太郎は画もよくする友人の石井を紹介した。

「・・全く氏（謙三）の特性がはっきりと表現されていてまことによいと思います。衆議院の中にとぢこめて置くのは惜しいような気が致されます。（松村秀太郎　石井鶴三宛て書簡）」

⑶④先憂後楽

町田忠治（１８６３～１９４６）秋田県秋田市保戸野に生まれる。帝国大学法科撰科を卒業する。

この作品は、１９４３年に書かれたもの。

「先憂後楽」は、天下のことについて人に先んじて憂え、遅れて楽しむこと。常に天下の平安を心がけていること。

⑶⑤松村松宇（清治　1842～1910　謙三先生の祖父）

還暦祝い祝賀貼りまぜ屏風　明治 35 年（1902）

松宇は薬種屋の４代目、維新の激動期に福光新町村の村長（所方副戸長）などの公職をつとめた。宮永菽園に学び、立本小学校の設立に際には教育設備の充実にも尽力した。栖霞園の設立にもかかわる。

早くに家督を長男和一郎に譲り、川原町の迎月亭に隠居し菊作り、俳句、茶道、謡曲、囲碁を友として余生を送った。

この屏風は明治 35 年 1 月還暦祝賀に当たって子孫。知友から贈られた作品や賀状をまとめて仕立て、身近に置いたもの。

この年、明治 35 年は謙三青年にとってまさに人生の転機。高岡中学を了え、家業のため薬剤師資格を取るようにとの父の希望にもかかわらず政治家への道をめざして早稲田大学（当時は東京専門学校）に進学する春に当たる。

寅年生まれの祖父に贈った虎の画は一見猫ふうでユーモラスだが、ご本人は絵が得意だったという。

子孫からのお祝いリスト（右下）から当時の謙三一族

為御祝進呈	進呈者	清治との関係
・賀瓢　杖	和一郎	長男
・徳利　仝袴	専四郎	三男
・賀画　名刺	謙三	孫（和一郎の長男）
・賀画	尚則	孫（和一郎の次男）
・仝上	勇	六男
・画字	順蔵	孫（谷村ちかの長男）
・仝上	武市	孫（専四郎の長男）
・折物	敬介	孫（谷村ちかの次男）
・手跡	康治	孫（専四郎の次男）
・仝上	鐵三郎	孫（谷村ちかの三男）
・目鏡入、頭巾、かばん	多美	長男（和一郎）の妻
・烟草入	志げ	長女（密田林蔵の妻）
・紙入	ちか	次女（谷村一太郎の妻）
・巾着	せい	三男（専四郎）の妻
・足袋	せき	三女（吉崎圓平の妻）
手巾、胸紐	とよ	孫（和一郎の長女）

（３）⑥ 坂田秀男氏より寄贈される木彫額

縦７４ｃｍ×横１７０ｃｍ

大意

先生の功績で渤海も葦の舟で渡れるほどに近くなった。先生は外交においては日中友好の睦みを深め、内政にあっては農業の重要性を説かれた。先生の後継者が現れ、その志は必ずや報われるだろう。先生の風格は山のように高く、水の流れのように長い。

松村謙三先生の功績を永遠に讃える。

一九七一年秋　郭沫若　印

石井滋　刀

経緯

松村謙三先生が亡くなられた時（１９７１年）に、中日友好協会名誉会長の郭沫若（かくまつじゃく）氏が、先生の生前の功績を讃えた書を揮毫され、その書から起こされた木彫額です。

郭沫若氏は、当時訪中されていた川崎秀二衆議員議員に書を託されました。

川崎氏は、預かった書を松村記念会館に納めるとともに、千葉県出身の彫刻家、石井滋氏に依頼し、この書の木彫額を作成され、ご自身で保管されていました。

川崎氏が亡くなられた時（１９７８年）、夫人から鯨岡兵輔衆議院議員に木彫額の保管先に関する相談があり、鯨岡氏と都議時代からの知人である坂田秀男氏が現在まで保管されておりました。

今年になり、坂田秀男氏は会社の移転（２７年６月）を機に、松村先生とゆかりの深い南砺市に寄附されることになりました。

松村謙三先生の略年譜

年次	年令	月日	松村関連事項
一八八三年 明治16	0	1・24	石川県砺波郡福光新町村（現富山県南砺市福光新町四六番地）に生まれる
一八九七年 明治30	14	4・1	富山県立第一中学校（のちの富山中学、現富山高校）へ入学
一八九八年 明治31	15	4・1	富山県高岡尋常中学校（現高岡高校）開校により転校
一九〇二年 明治35	19	4・10	東京専門学校（早稲田大学）高等予科へ入学
一九〇三年 明治36	20	9・	早稲田大学政治経済科へ入学
一九〇六年 明治39	23	7・11	早稲田大学政治経済科を卒業。これに先立ち初の大卒幹部候補として報知新聞社に入社。
一九〇八年 明治41	25	5・1	妻静枝死去
		10・	大阪支社長に就任
一九一〇年 明治43	27	3・12	山田こ乃と結婚
一九一一年 明治44	28	5・21	東京本社へ転任
一九一二年 明治45	29	1・11	父和一郎死去 この夏、報知新聞社を辞めて福光町に帰り、家業薬種商を継ぐ。
一九一七年 大正6	34	4・22	福光町会議員
一九一九年 大正8	36	9・	富山県会議員
一九二三年 大正12	40	1・	福光町耕地整理組合長に就任
		6・15	永井柳太郎氏、平野英一郎氏とともに華北旅行に出発（八・一〇頃帰国）
一九二五年 大正14	42	5・	福光町耕地整理工事終了
一九二八年 昭和3	45	2・20	衆議院議員初当選

一九二九年	昭和4	46	5・ 民生党済南事件視察団員として済南に赴く帰途奉天にて張作霖爆死事件に遭遇。
			7・5 町田忠治農林大臣の秘書官となる
一九三〇年	昭和5	47	2・20 衆議院議員当選（当選二回）
			8・10 妻こ乃死去
一九三一年	昭和6	48	11・ 平山ひさと結婚
一九三二年	昭和7	49	2・20 衆議院議員当選（当選三回）
			6・1 農林参与官となる
一九三六年	昭和11	53	2・20 衆議院議員当選（当選四回）
一九三七年	昭和12	54	4・30 衆議院議員当選（当選五回）
一九三八年	昭和13	55	4・18 民政党政務調査会長
一九三九年	昭和14	56	1・19 農林政務次官
一九四二年	昭和17	59	4・30 衆議院議員当選（当選六回）
			9・8 満州国建国十周年祝典に衆議院代表として参加
一九四五年	昭和20	62	2・ 板橋区石神井谷原町へ疎開
			4・7 大日本政治会幹事長
			8・17 東久邇宮内閣厚生大臣（八・一八まで文部大臣兼任）
			10・9 幣原内閣農林大臣、食糧供出懇請のため地方行脚。農地制度改革案に取組む。
一九四六年	昭和21	63	1・12 公職追放令該当により農林大臣辞任
			8・31 公職追放の指定を受ける。以後、中野区鷺宮六丁目七五六（現上鷺宮五丁目一三番六号）の山林を拓き仮寓を建て、晴耕雨読の生活を送る。また、「町田忠治翁伝」の執筆を依嘱され従事。
一九五〇年	昭和25	67	8・31 「町田忠治翁伝」刊行
一九五一年	昭和26	68	8・6 公職追放指定を解除。民政旧友会を組織（のち新政倶楽部と改称）。
一九五二年	昭和27	69	2・8 改進党結成と共に中央常任委員会議長就任

		10・2	衆議院議員当選（当選七回）
一九五三年	昭和28	70	
		4・19	衆議院議員当選（当選八回）
		6・15	改進党幹事長
一九五四年	昭和29	71	
		11・24	日本民主党政務調査会長
一九五五年	昭和30	72	
		2・27	衆議院議員当選（当選九回）
		3・19	鳩山内閣文部大臣
一九五六年	昭和31	73	
		12・	来日中の郭沫若氏と会見、訪中を勧められる
		3・23	日中文化交流協会設立とともに顧問就任
一九五七年	昭和32	74	
		1・23	石橋首相の個人特使として中近東・東南アジア諸国の親善訪問する
		12・	来日中の廖承志氏と会う
一九五八年	昭和33	75	
		5・22	衆議院議員当選（当選一〇回）
一九五九年	昭和34	76	
		1・24	自民党総裁公選に立候補。岸首相に三二〇対一六六票で敗れる。
		10・19	周恩来首相の招待を受け第一次中国訪問に出発。周首相らと会談のあと各地を歴訪。
		10・26	永年在職議員（二五年在職）として衆議院本会議において表彰される。
一九六〇年	昭和35	77	
		5・19	衆議院における新安保条約の自民党単独採決に反対。石橋湛山、河野一郎氏と共に欠席。
		11・20	衆議院議員当選（当選一一回）
一九六一年	昭和36	78	
		2・21	「続三代回顧録」北日本新聞に連載開始
		5・5	中国との囲碁交流につくした功績により、日本棋院より五段を贈られる。
一九六二年	昭和37	79	
		4・30	欧州共同市場（EEC）視察
		9・12	第二次中国訪問に出発（九・二五帰国）。
		9・19	北京で周恩来首相と会談。廖承志氏と共に日中間の総連絡的役割を担うことになる。
		10・20	早稲田大学より名誉法学博士の学位を贈られる。

		10・	財団法人桜田会理事長就任
一九六三年	昭和38	80	11・21	衆議院議員当選（当選一二回）、最年長議員となる。
一九六四年	昭和39	81	4・9	第三次中国訪問に出発（五・六帰国）。
			4・19	北京にて松村謙三・廖承志覚え書きを発表
				LT貿易連事務所設置で合意、調印
			9・25	「三代回顧録」出版（東洋経済新報社）記念会（於ホテル・ニューオータニ）開かれる。
一九六五年	昭和40	82	11・6	勲一等旭日大授章授与、親授式において叙勲者を代表して挨拶。
			8・3	自民党顧問就任
一九六六年	昭和41	83	5・20	第四次中国訪問に出発（五・二四帰国）。
			6・4	自民党A・A研で訪中の公式報告を行う。同日、世界平和アピール七人委員会主催の中国問題懇談会で保守二党論を提唱、波紋をよぶ。
一九六七年	昭和42	84	6・20	福光町名誉町民の称号を贈られる
			1・29	衆議院議員当選（当選一三回）
			五・二二	富山県福光町刀利ダムの完成式に参列
一九六八年	昭和43	85	10・10	訪中の田川誠一氏周恩来首相あて親書（抑留日本人記者の釈放等）を託す。
一九六九年	昭和44	86	2・14	覚書貿易交渉代表団（古井喜實団長）に周恩来首相あて親書（貿易継続の要望等）を託す。
			7・10	富山県立福光高校で行われた立野ヶ原パイロット事業起工式、近隣七地区圃場整備事業完成式に出席。これが郷土入りの最後となる。
			9・19	次回総選挙に不出馬を声明
			11・3	第十一回北日本文化賞を北日本新聞社より贈られる。
一九七〇年	昭和45	87	3・10	日中覚書貿易交渉開始（代表古井喜實）難航
			3・20	第五次中国訪問（松村、藤山、田川、川崎、岡崎）に出発（四・二三帰国）。
			3・24	郭沫若氏と会談

		4・19 周恩来首相と会談
一九七一年 昭和46	88	1・24 満八十八歳の誕生日を自宅で祝う
		2・1 国立東京第一病院に入院。四月頃より黄疸症状を発して一進一退す
		8・21 午後九時三〇分、化膿性胆管炎と胆石症のため国立東京第一病院において死去
		8・23 自宅において密葬 日本棋院より囲碁六段を追贈される
		8・24 従二位に叙し、旭日桐花大綬章を追贈される
		8・25 築地本願寺において通夜、同所で「故松村謙三先生を偲ぶ会」開かれる。王国権中日友好協会副会長、葬儀参列のため来日。
		8・26 築地本願寺において葬儀および告別式
		9・4 福光中学校体育館において福光町葬。夜同所にて追悼演説会開かれる。
		9・15 郭沫若氏より中国訪問中の川崎秀二氏を通じて松村記念会館のために追悼の誄を贈られる。
		9・25 松村謙三顕彰会の醵金により福光町に建設中の「松村記念会館」完成。完成式並びに銅像（松村秀太郎氏作）の除幕式行われる。
		10・17 遺骨を福光町坂本の松村家墓地に葬る
		12・3 葬儀に際しての厚意に謝するため、小堀治子、松村進ら、覚書貿易交渉団と共に中国へ出発周首相に会い謝辞を述べる
一九七二年 昭和47		3・21 松村謙三追悼会催される（於ホテル・ニューオータニ）
一九七七年 昭和52		8・21 一周忌に際し、東京小石川護国寺に墓所（大隈重信・町田忠治先輩も眠る）を設け分骨を葬る
		8・21 七回忌に際し、遺文集「花好月圓」（遺族編）を刊行
一九八一年 昭和56		8・23 「松村謙三先生十年祭」を福光町と松村顕彰会主催で行う。
一九八三年 昭和58		3・21 中国紹興市と福光町の「友好市町締結」が実現、紹興市において調印式
		5・8 「松村謙三先生生誕一〇〇年記念祭」を福光中部小学校で挙行。